

長岡療育園に奨励賞

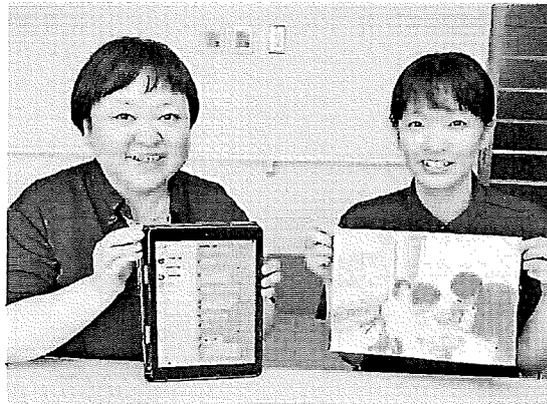
読売療育賞 オンライン面会効果調査

重症心身障害者施設で働く職員の優れた実践研究に贈られる「第17回読売療育賞」（読売光と愛の事業団主催）の奨励賞に、長岡市深沢町の「長岡療育園」が選ばれた。新型コロナウイルスの感染拡大予防のために家族らとの面会が制限される中、新たに導入したオンライン面会で入所者がどのように対応するかを調べ、有効性や課題をまとめた。

研究に取り組んだのは、指導員の夏目ゆりかさん（31）と小林まどかさん（44）。新型コロナウイルスの影響で面会中止が続いていた昨年5月、同園は無料通信アプリ「LINE」のビデオ通話機能を使ったオンライン面会を導入した。言語の理解が難しい入所者は面会時に手を握り合うなどスキンシップが中心となるため、当初は有効かどうか不安だったという。

全入所者140人のうち、昨年5月〜今年1月にオンライン面会を実施した50人を対象に、実施時の様子を「表情」「視覚」「聴覚」「発信」の観点から整理した。言語が理解できない31人のうち22人は画面に家族が映ると表情が変化し、画面越しの声に反応する人もいたという。簡単な言語が理解できる15人は、視覚による反応よりも声が

面み夏
組る右
返る（右）
取り返さん
ラ取り返さん
会を振さ小
目をと小



オンライン面会を実施した50人を対象に、実施時の様子を「表情」「視覚」「聴覚」「発信」の観点から整理した。言語が理解できない31人のうち22人は画面に家族が映ると表情が変化し、画面越しの声に反応する人もいたという。簡単な言語が理解できる15人は、視覚による反応よりも声が

喜ぶ。一方で、週2回ほどオンライン面会を重ねた男性が嫌がるそぶりを見せたこともあり、「実際の触れ合いにまさるものはない。オンライン面会では中身を充実させる必要がある」と実感した」と振り返る。

今年4月には入所者の家族ら144人にもオンライン面会に関するアンケート調査を実施。オンライン面会を実施した64人のうち7割以上が、面会禁止期間などに今後も希望すると回答した。また、8割以上が入所者の様子を知ることが目的としており、「コミュニケーションをとることは難しいと考えている人が多い」とも分かった。

小林さんは「面会も外出もできなかった入所者にとって、オンライン面会は唯一と言っていい社会とのつながり。想定以上に入所者の刺激になった」とした上で、「家族との触れ合いの環境が向上するように取り組みたい」と今後に向けて意欲を見せた。

みどりの施設の施設に奨励賞

読売療育賞 口腔衛生管理を徹底

重症心身障害者施設で働く職員の優れた実践研究に贈られる「第17回読売療育賞」（読売光と愛の事業団主催）の奨励賞に、みどりの市の医療型障害児入所施設・療養介護事業所「療育センター きぼつ」が選ばれた。入所者が感染症に罹患するのを防ぐため、口腔衛生管理を徹底する取り組みが評価された。同センターの歯科衛生士福島友枝さん(55)は「医療スタッフ全員の協力があったのが受賞。入所者がより楽に暮らせるよう努力を重ねたい」と喜ぶ。



同センターでは外来患者のほか、約130人の入所者が生活をしている。特に障害の重い入所者の発熱頻度の多いことが課題になっていた。寝たきりのため栄養や水分はチューブで鼻から注入あるいはチューブで直接胃に送っており、口を使って食べたり飲んだりすることはできない。看護師たちが1日3回歯磨きを行っていたが、改善はみられなかった。

昨年5月、担当医師の指示によって、福島さんと同僚の鈴木菜緒さん(29)が歯科衛生士として、入所者の口腔ケアに加わるようになった。普段は歯科外来で患者に対応しているが、1日1時間近くをやりくりして、20〜50歳代の入所者10人を担当した。通常の歯磨きに加えて、1日1回、吸引式歯ブラシなど専用器具で汚れを取り、口の中全体の消毒を続けた。

福島さんたちの取り組みは昨年12月まで7か月間続けられた。その結果、発熱回数は目に見えて減ったという。「気管から肺に流れていた歯垢などの汚れたものが少なくなったためではないか」と福島さんたちは推察する。

また、毎日の口腔ケアで10人の表情が和らいできた効果もあったという。歯科衛生士による口腔ケアは対象者を増やし現在も続けられている。福島さんは「発熱回数が減れば入所者の安心になる。受賞を励みにしたい」と話している。

受賞を喜ぶ歯科衛生士の福島さん(右)と鈴木さん(みどりの市で)

(第3種郵便物認可)

読売療育賞 松江のセンター 奨励賞 聴覚障害児の伝達力育む

重症心身障害者施設で働く職員の優れた実践研究に贈られる「第17回読売療育賞」(読売光と愛の事業団主催)の奨励賞に、松江市の「東部島根医療福祉センター」が選ばれた。研究は、自閉症の人らの療育法を応用し、聴覚障害がある幼児のコミュニケーション能力を高めるというもの。センターの言語聴覚士、青山知世さん(38)は、試行錯誤した取り組みが評価されてうれしいと喜ぶ。



「小さな階段を一緒に上っていきたい」と話す青山さん(松江市で)

センターは、医療型障害児入所施設と療養介護事業所を運営し、約90人が入所する。外来診療や在宅・通所事業も担い、障害のある人らを支援している。

青山さんは、生後すぐ難聴や特有の顔貌などを伴う染色体疾患「コルネリア・デ・ランゲ症候群」と診断された男児を担当。男児は成長とともにおもちゃ遊びに没頭し、おもちゃがなくなると泣き声を上げる

ことがあったが、その意図が判然としなかった。

そこで「自分の欲求を伝えられるようにしてあげたい」と思い、自閉症や脳性まひ、発達障害の療育に用いられる「絵カード交換式コミュニケーションシステム」(PECS)を取り入れたトレーニングを始め

た。まず、男児に複数のおもちゃで遊んでもらい、関心の高いものを青山さんが隠す。直後に、そのおもちゃ

が写ったカード(縦6枚、横8枚)を見せ、男児がカードを手を取った場合にだ

け、再びおもちゃを与える、というものだ。

男児が3歳の頃から始め、5歳になるまで月1、2回、センターで約30分間、やりとりを繰り返した。この結果、腹ばい状態でカードを見るのと比べ、椅子に座った状態の方がカードへの反応が高く、PECSの効果には体幹の安定が欠かせないことが分かったという。

スタートから2年。男児は、机上でボールを転がし合う遊びにも興味を示すよ

う。

うになり、「他人に働きかけると『楽しい反応が返ってくる』ということを学び始めている」と青山さんは目を細める。「将来は複数のカードで、思いを伝えられるようになってほしい」とほほえんだ。

ワクチン3回目 高齢者前倒しを

浜田市、国に要望

新型コロナウイルスワクチンの3回目接種について、浜田市は9日、高齢者